

## 徳島文学協会 活動開始

二〇一七年春に産声を上げた徳島文学協会、七月より本格的に活動を開始した。記念すべき第一回目の企画は七月二十二日に開催された「わたしのイチオシ小説」。

出席者がお気に入りの小説を持ち寄り、持ち時間七分で作品の魅力や読みどころを紹介し合うというものだ。プレゼンが終わると参加者全員で投票し、その日のイチオシ小説を決定する。栄えある第一回「イチオシ小説」に選ばれたのは富士野賢太さんイチオシの「ハーモニー」（伊藤計劃著）だった。富士野さんには協会ホームページに紹介文を書いていただき、その原稿執筆料として五千円分の図書カードが贈られた。

続いて八月十一日には芥川賞作家の吉村萬壱先生を囲んでの食事が開催された。このような企画は徳島文学協会ではできない催しといえるだろう。出席された会員の皆さんは大変喜ばれ、吉村先生との楽しい時間を堪能した。

また八月十九日にはおとなのための文学講座「夏目漱石と芥川龍之介」が開催された。このイベントは夏目漱石の作家デビューから、有名な作品がどのようにして誕生していった

か、その秘密に迫るといったものだった。講義の後半は漱石と入れ替わるようにして文壇に現れた芥川龍之介の人生について学んだ。意外な漱石との関係にも注目し、芥川の文学性にも迫った。大学のゼミのような雰囲気に参加者からは面白かったという意見を多数もらい、大いに盛り上がった。

さらに九月九日には「エッセイ講座」が開催された。プロジェクターを使って分かりやすく解説したり、既存の作家のエッセイや講師自身が選考委員をつとめる「とくしま文学賞随筆部門」の受賞作などを鑑賞したりして、本当によい文章とは、どういったものかについて考えた。参加者からはエッセイだけでなく小説などをこれから書く方にも参考になる内容だったとの感想をいただいた。

十月十五日に行われた「小説実作講座（入門）」の第一回目では、純文学作品とは何かというテーマで、ワークショップなども取り入れて皆さんに楽しみながら学んでいただいた。

今後、年末まで三回シリーズとなっており、実際に全員で文学作品を鑑賞したり、実作に挑戦したりと、多彩な内容を準備している。



八月十一日に開催された吉村萬壱先生を囲んでの夕食会



八月十九日に開催された大人のための文学講座

## 徳島文学協会の飛躍を期待

佐々木義登

「徳島文学協会」が設立して五ヶ月が過ぎた。「文学の力で徳島を元気に」をコンセプトに吉村萬壺さんや玄月さんといった芥川賞作家も会員に名を連ねていただいた。立ち上げたばかりで四十人あまりだが、これから一層飛躍できると信じている。

改めて「徳島文学協会」の役割を二つ挙げてみたい。

一つは広く県民の皆さんに文学の魅力をお伝えすること。あまり本を読んだことがない方でも、本物の文学に触れていただくことで文学に対する印象が一変すると思う。そうして関心を持ってもらった皆さんと、文学講座などを通じて文学の奥深さを感じてもらおう。次第に心が豊かになり、世界の見え方まで変わってくると思う。

もう一つは、文学に関心を持ってくださった皆さんに自ら表現することにチャレンジしていただくということだ。「作品執筆」というとハードルが高く感じるかも知れないが、実は文章を読む行為と書く行為はそんなに違わない。実際に書くことで作者は自分の人生を見つめ直し、生きていくことの意義や、世界の倫

理について考察することができる。まさにその営為の中に心の豊かさが生まれてくる。

私自身、徳島にUターンしてからの六年間で多くの県民の皆さんと、一緒に文学作品を読んだり、小説を書いたりしてきた。その経験の中でたどり着いた結論がある。それは徳島県民が、極めて高い芸術的センスを持っているということだ。決してお世辞ではない。

ちなみに私は二十五年間、東京や神奈川県で生活していた。文学イベントや、小説講座にも何度も足を運んだ。その経験と比較しても徳島の皆さんの文学的センスは段違いに優れていると感じている。ただ惜しむらくは、ほとんどのの方が才能に気付いていないということだ。きつかけさえあれば開花するのは間違いない。

妄言でも虚言でもなく、これから数年のうちに「文学と言えば徳島」というくらいに、文学が盛んな県として全国に知られるようになるだろう。県在住の作家が次々に生まれ、学生生徒からシルバーク世代まで皆が文章表現を楽しむ。そんな素晴らしい文化が育まれる。

徳島の人たちが言葉の力で元気になり、人生をいきいきと過ごせるように力をつくす、それが「徳島文学協会」の役割だと思っている。

## 『徳島文学』 二〇一八年春、創刊。

徳島文学協会発行の文芸誌

『徳島文学 創刊号』の原稿を募集します。

徳島文学協会では、年一回文芸雑誌を発行します。芥川賞作家やプロの文学者を筆者に招き、地方の文芸誌としては類を見ない商業雑誌に匹敵するクオリティの雑誌を目指します。会員の皆さまの優秀作品をプロの作家と同じ誌面に無料で掲載いたします。皆さまの傑作をお待ちしています。会員の方全員に、創刊号を進呈します。

話番号をお書きの上、作品にはページ番号をつけてしっかりと綴じてください。応募作品の返却はご遠慮ください。

### ◆締め切り

二〇一八年一月十日(水)必着  
徳島文学協会事務局まで郵送ください。

### ◆掲載発表

応募された作品は会長を含む徳島文学協会理事全員で厳正に審査し、掲載可か不可を決定します。掲載が決まりましたら、ご本人にご連絡いたします。掲載作品の著作権は掲載から一年間、徳島文学協会に帰属します。

### ◆宛先

〒七七一・三三〇一 徳島県名  
西郡神山町阿野字方子一〇三  
徳島文学協会事務局「原稿募集」係

電話 〇八〇・六二八四・〇二  
九六(日曜祝日を除く九時～  
十七時迄)

### ◆応募資格

徳島文学協会会員限定

### ◆応募作品

小説・評論・随筆・詩・短歌・俳句など広義の文学作品、および書評。未発表作品に限る。

### ◆原稿規定

枚数不問。掲載時に原則、テキストデータの提出が可能なもの。

縦書きを原則とします。パソコン・ワープロ原稿の場合は四百字詰原稿用紙での換算枚数を明記してください。表紙に会員番号・住所・氏名・電

## 多様性こそが豊かさ

大串正

徳島文学協会は、「徳島に暮らす人々が希望や生きがいをもって生活できるように、文化的、芸術的な側面から県民をサポート（HPより引用）する団体です。では、文化・芸術、とりわけ文学はどのように人々に希望や生きがいをもたらすのでしょうか。その関わりについて私見を述べたいと思います。

本を読むことなど文学と関わることは、その地域の人々を啓蒙して人間性向上に寄与するのでしょうか。いいえ、そうではありません。かの松岡正剛氏は次のように述べています。『読書を神聖なものだとか、有意義なものだとか、特別なものだと思わないほうがいい。読書はもともと多様なものだ。だから、本は「薬」にもなるが「毒」にもなるし、毒にも薬にもならないことも少なくない。読書はつねにリスクを伴うと思ったほうがいい（松岡正剛著『多読術』より引用）。』読書は常に人を益するとは限らないのです。

「毒」にもなるようなものがどうして人に希望や生きがいをもたらすとと言えるのでしょうか。言えません。それどころか人を絶望の淵に突き落とすことさえあるかも知れません。つまり文学がもたらすのは、希望や生きがいだけではなくもっと広く深い世界なのです。そこにはポジティブなものもあればネガティブなものもあり、美しい

ものもあれば醜いものもあります。しかし、その多様性こそが豊かさではないでしょうか。

文学は今よりも広く豊かな世界に人々をいざないませんが、その世界は常にリスクを伴います。飛び込むには覚悟が必要ですが、そこには今まで見たことのない景色がきつと広がっている筈です。

## 熱い鋼を携えて

滝沢壽男

小説のようなものを書きだして一年。本会に入会するか、その資格があるかを考えあぐねていた時期に佐々木義登先生からいただいた言葉がある。「芸術を学ぶというのは、高校の勉強のようなものとは全く違います。むしろ伝統芸能や刀鍛冶を学ぶことに似ています。師匠や優秀な人の姿勢や腕を見て盗むものです」

「高校の勉強のようなものではない」というくだりは漠然と理解できる。しかし、私の頭の中で刀鍛冶と小説の創作はしっかりと繋がらない。刀鍛冶を知らないからだ。そこで調べてみた。

日本刀完成までは、長くとつてもなく時間がかかるようだ。原料となる玉鋼を作り、刀の出发点となる鋼を選別し、そこから強い刀を生み出すための「鍛錬」という段階に入る。真っ赤に焼けた鉄の塊を鉄の槌を持った数人が囲み、息を合わせ叩き上げる。その工程を繰り返し折り曲げては叩く。皮

金と呼ばれる硬い材質の鉄を包み、焼いて叩いて圧着させる工程が続く。各工程の詳細なマニュアルは無く、経験によって体得していくものらしい。熱く鉄を焼き、槌を下ろす、ただひたすら赤く焼けた鉄から目をそらすことなく叩いて刀という最終形に向かって行く。「相槌を打つ」、「鍛錬」は日本刀の工程から生まれた言葉だという。

熱く熱せられた鋼（書いた文章に）槌をどのように振り下ろすのか、焼き入れ鍛冶（砥ぎ研磨（推敲）までをどのように極めるかを学ぶ場所が徳島文学協会なのだろう。協会のメンバーや作家の姿勢や腕を見て、それが自分の技術となり身につくのはどのくらい先のことになるのだろうか。

まずは、ふいごの扱いに慣れ炉の温度を調節し、常に熱い鋼（書きたいという熱意）を準備しておくようにしよう。真面目にコツコツと精進することとしたい。自分の生んだ作品が焼き入れ、鍛冶（砥ぎ、研磨）まで進んだ後放つ光を見てみたいと思う。

## 月夜

久保訓子

住居の周りを覆う緑が濃くなると、夕刻から深夜にかけて啼くフクロウの声が、いつからかホトトギスの声にかき消されるようになった。ホトトギスは朝も啼き昼間も啼き夕刻にはとても啼いて、深夜にも啼いている。ひよっとしたら、深夜に聞くのは幻聴なのかなと思うことがあって、両親に

訊いてみたら、夜の声は聞いたことがないという。そういえば九十に近い両親はそるって耳が遠いうえに、睡眠薬を飲んで寝ているのだった。

庭の木に来ていたのか、屋根のすぐ上を飛んでいたのか声が姦しく聞こえた夜、赤く腫れあがった咽喉の夢を見た。小さな鳥があれだけの声を上げるのだから、という私の気持ちが反映されてのことだろう。子どもの頃、夜啼く鳥の声は死者の声だと、何かで読んだことがあって、ずっとそう思ってきた。フクロウの声やヨシキリの声やホトトギスの夜の声を最近になって聞くようになり、ひよっとしたら、死者とも交信ができるような年齢になっているのかもしれない。

感動した事などを気まぐれに記録しているノートを開き、書いていたことを声に出して読み上げてみる。「文章の中から事物が浮かび上がってきて、聴き手や読み手の意識の中にその事物だけが残る、そして言葉は記憶から消えている。文章はそうあってほしいものだ」と彼はいつている。これはいつの時代にも通用する散文の極意である」文芸誌に載っていた保莉穂穂さんの一文であり、彼とは、城館の塔の中を書斎にしていたというモンテーニュを指すのだと記憶する。

ホトトギスの声が聞こえてくる。硝子戸を開ければ、濡れ濡れとした月夜である。



# 講座案内

## 「小説実作講座(入門)」

二〇一七年秋から「小説実作講座」が開始します。気軽に学んでいただける文章表現の入門講座です。小説の基本から具体的な表現方法まで分かりやすく解説します。初めて小説を書く方でも、コツをつかむことで短編小説を完成させることができます。

講座ではワークショップを行ったり、ティーチングアシスタントからのアドバイスなども導入し、効果的なスキルアップを目指します。徳島ではかつてない新たな取り組みです。ぜひ楽しく実作に取り組んでください。なお、ご出席の際は筆記用具をご持参ください。

### ■開催日 十一月二十五日(土)

十八時三十分～二十時

十二月九日(土)

十八時三十分～二十時

場所 シビックセンター4F活動室1

講師 佐々木義登

参加費 一回あたり会員一五〇〇円

定員 各十五人

### ■開催日 平成三十年

一月二十七日(土)

十九時～二十時三十分

二月二十四日(土)

十九時～二十時三十分

三月二十四日(土)

十九時～二十時三十分

場所 徳島県立文学書道館

講師 佐々木義登

参加費 一回あたり会員一五〇〇円

定員 各十五人

## 「やさしい哲学講座(予定)」

会員の皆さんからのご要望にお応えして、哲学の基礎を分かりやすく学ぶ講座が開設されます。詳細は決まり次第改めてご連絡させていただきます。

開催日 二月十日(土)

十九時～二十時三十分

場所 徳島県立文学書道館

講師 佐々木義登

参加費 会員一五〇〇円

定員 十五人

## ご入会のお申し込み方法

- 一 事務局に資料をご請求ください。入会案内一式をお送りいたします。
- 二 会の運営のご賛同いただけましたら、同封の郵便振替用紙をご利用の上、年会費(個人七千円、法人一万三千円)をご納入ください。
- 三 振替用紙の、ご依頼人の欄にご住所およびお名前を明記ください。
- 四 郵便局の受領証をもって徳島文学協会の領収書に代えさせていただきますのでご了承ください。当会の領収証がご入用の場合はお申し出ください。

お問い合わせ先 徳島文学協会 事務局

住所 〒七七七-三三〇一

徳島県名西郡神山町

阿野字方子一〇三

電話 〇八〇・六二八四・〇二九六

メール [society@t-bungaku.com](mailto:society@t-bungaku.com)

担当 久保訓子

「とと」：古代エジプト文明の知恵の神「トト」に由来する。

## 事務局からのお知らせ

### 【メールお知らせサービスについて】

事務局宛にメールアドレスをお教えてください。(携帯メール可)

文学イベントをお申し込みいただいた方に、開催日が近づきますとメールでお知らせいたします。

事務局メールアドレス

[society@t-bungaku.com](mailto:society@t-bungaku.com)

HPも随時更新しています!

<http://www.t-bungaku.com/>